
優しさの形状

kino

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
優しさの形状

【Nコード】
N9829A

【作者名】
kino

【あらすじ】
半年前に別れた恋人からのコール。

足音がこつちへ近づいてくる。

風は、疎らに咲いたクロツカスを撫でるように優しく梳いていく。

「ミサ、来てくれたんだね？」僕は聞いた。

「…暇だったから」ミサはそう答えた。

ミサは白いセーターの袖をつまんで、口元に当てている。吐く息は、ほんのりと白い。

川岸から5メートルも離れていないところに腰をおろしている青年は、ずっと対岸を眺めている。ミサは青年の隣りに座った。

「なんのつもり？ こんな時間に呼び出して、……ねえ、ケイ、聞いている？」

ケイと呼ばれた青年は空を見上げる。彼は取り出したタバコに火をつけた。

「なんのつもり…か。ミサに会いたかった、では駄目なの？」

「私たち、もう半年も前に別れたのよ？」ミサは横目でケイを見た。「…しかも、あなたは私を振ってる」

「でも、こうして来てくれたじゃないか」

「それなのに、気安く連絡かけられる厚顔無恥な元カレを笑いに来たのよ」ミサは苦笑して言った。

ケイはミサの顔を見ることが出来なかった。

「反論の余地はないな」ケイは首を横に振って答えた。「まあ、そんなことをする気力もないけどね」

「どうしたのか知らないけど、私は関係ないから」そうは言ったが、ミサは気づいていた。本当にどうでもよかったのなら、ここへ来る必要などなかった。

「…父さんが死んでいることがわかったんだ」ケイの吐く息は白い。ミサにはそれがタバコの煙なのか、それとも、寒さからくるものなのか、判別出来なかった。

ケイの父は、彼がまだ幼かった頃に失踪した。彼は探偵を雇い、父の行方を追わせていた。そして、先週のこと、父の死をあっけらかんとして報告してきた探偵を殴りつけてやった。

別に父の事が好きだったわけじゃない。ただ、父へ向かうはずだった一撃は、行き場をなくしたことで、近くにいた探偵を捉えた。彼には気の毒だったとしか言いようがない。

「…だから、少し慰めてもらいたかった」ケイは相も変わらず対岸を、いや、本当は何も見えていなかった。

「彼女に慰めて貰えばいいでしょ？ ……あ、わかった！ 別れたんでしょう？」

ケイは小さく首を振った。「いや、別れてないよ」

「…じゃあ、なんで？」

本当はわかっていたはずでしょ？

「なんで、私が呼ばれなきゃいけないの？」

嬉しいはずなのに…。

「迷惑」

口をついて出て来るのは、いつもこんな。

わかっていたはず。ケイは、いつもいつも私のことばかりを思っていた。

気づいていたはず。でも、無視してた。怖かったから。だって、別れを告げたあなたの瞳は、もう既に光を失ってきていたから。

「視力、どれくらい落ちてるの？」ミサは見上げるような目線で

言った。

「そうだね、好きだった君でさえ、僕の目は、もう映そうとしないんだ」

「……そう」

「今日は来てくれてありがとう。ずいぶん楽になったよ」

「私、何もしていないわ」ミサは少し大げさなジェスチャー。

「したよ」ケイはそう言って、ミサが来た方とは逆の方へ、歩いていく。

「……そう言って行っちゃうんだ。あの時のように……また、……私を振るの?」

ケイは振り返って、まるで鏡に映っているかのように静かに微笑む。

「ありがとう、ミサ」

……。

（後書き）

ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9829a/>

優しさの形状

2011年1月14日14時51分発行